写真特集 メーデー万歳！

←左は、いろんなデモや青空市場風景。

入一春闘をふり返って思う

港務所に働く一組合員

金に替えてよいのかスト権

今怒りを燃やさねば……

何を意味する三井の態度

期待に程遠い賃上げ妥結額

手記

一方七百三十円の要求の満額獲得を期して闘った春闘での、炭労の賃上げ交渉は当初から会社回答〝ゼロ〟、という全く炭鉱労働者を馬鹿にしたものであった。

公共料金をはじめとする諸物価の値上がりはひどく、われわれの家計は赤字の中で苦しんでいる。いっぽう、石油高による石炭見直しが貯炭の減少となるほど石炭が売れ、こんな明るい材料のもとでわれわれは一方七百三十円という極めて控え目な要求を出していたのに、このゼロ回答は当然炭鉱労働者の怒りをかった。

満額獲得までやめじとする、五日間にわたった実力行使。一方四百四十五円と解決一時金人当たり三千円、家族手当第一順位六百四十五円が加わるということで、炭労は六日目からのストを中止。妥結を決めた。

妥結は、われわれの要求には程遠いものであった。

しかし今回の実力行使は、たとえ賃上げ幅が期待通りには伸びなかったが、われわれはそれによって闘ったということで、今までになく炭労の戦闘性が評価できてうれしい。資本の壁がどれほど厚くても、われわれ労働者には闘う以外勝ち取るものはないのだ。

だが、われわれ三池炭鉱の労働者の主力は、今だに新労との統一行動さえつくり出せず、さらにますます広がる下請けによって職場を占められてゆく。

会社の、このような強気な生産・労働対策の背景となっているのは、新労のあの平和協定にあることはもちろんである。

歴史的に見ても、三池炭鉱労働者が現実に生命をかけて闘い取ってきたスト権を、安易に金に替えたりしていいものだろうか。三井鉱山はうまうまとこれを買いとって、そして労働運動の外掘を埋めてしまった。

会社はその上、生産性向上運動を強力に推進しては、無気力な労働者をつくろうとしている。またはZD運動に乗せられては、職場の改善提案などを行い、自からの首を締めるような労働条件改悪を自からが提案するような労働者を会社はつくりつつある。

思えば、明治四十四年に三井鉱山株式会社を設立して以来とり続けてきたアメとムチの政策こそがその労務政策の基幹であり、その政策を貫徹するために会社は常に差別と選別を巧みに利用してきた。三池炭鉱は、当時一般坑夫とは別に多くの囚人労働者を使役していたが、これが今日なお続けられている低賃金体制への重要なキーポイントをなすものである、ともいう。

今も、三井鉱山・三井石炭がわれわれ炭鉱労働者に対する基本的な考え方は変わってないことを改めて思う。今回の賃上げ要求に対して、当初「ゼロ」回答を出してきた三井の態度に、そのことがよく表われているのではないか。

今怒りに燃えなければ……

われわれ三池炭鉱労働者は、組織の別なく今怒りに燃えなければウソだ。新労の若手労働者の中には「オレ達の組合は、他人のふんどしで相撲をとり続けているもの。どうしようもなか。どうか頑張ってくれんの」、と激励するものもいた。でも、闘わずして賃上げだけを懐に入れる、そんな鉄面皮なことがいつまでも許されてゆくはずがない。こんな新労の利己的な行為こそが、毎年の、低い賃上げしか獲得できず、また他産業にますます水をあけられ、いつまでも果てしなく続く劣悪な労働条件で働くことを余儀なくされる根源となっているのである。

以前をふりかえれば、あたかも賃上げが物価上昇の悪循環の元凶のように解説していた評論家の間にも、最近とみに低くおさえこまれ続けている賃上げ闘争に同情（？）して、「もっと強いストライキを打って賃上げを勝ちとるべきで、それが国の景気の上昇につながってくる」、と言い出している人もある。

とにかく今次の賃上げ闘争は終ったが、われわれは春闘で団結したエネルギーを、第七次石炭政策に、かねて提出している要請事項を貫く闘いに向けて立ち上がらねばならない。それは、国民的課題でもある。

ところで以上の話は、ちょうど春闘のまっただなかのことだが、Gさんの意見にあるように「目ン玉んいろが変わらんなら、取れるものも取れん」にきまっている。

それにしても今第一の問題は、新労組が会社と締結している〝平和協定〟（スト権を売り渡した）で、まずこれを撤廃すること。これこそが不幸のもとだから。

花見余談

あれ、何でチップをはずんだのかな？

▼…花見の酒にすっかり酔った、職場のAさん、ハシゴ酒をして回ったあと帰りにタクシーを呼ぶ。

走る。どうも、窓外の夜の街並がおかしい。

Aさん「あんたは、どこさんゆきよっとな？　おりげはあっちていうたろが」

運転手「ゆきよるですたい。何ばいいよっとな？」

Aさん「何ばいいよっとなとは何か。おい！」

しばらく、そうやっていい合ったあげく――

運転手「すんまっせん」

Aさん「いやア、わかればよかったい」

気をよくして帰り、料金を支払う。

運転手「千円と〇〇円です」

Aさん、二千円を差し出しながらいう――「よか。あとはとっとかんの」。

運転手「どうも」

あくる日、職場に出勤してきたAさんは首をかしげてつぶやいた――

「おれは、ケンカしたタクシーの運転手に、何でチップばはずんだつじゃろか」

×

三川坑外職場の新聞〝はぐるま〟（四月十五日発行のNo・一四〇）から。

取るためにはストだ

伝えた職場の声

〝はぐるま〟

Aさん　どうせ世間並み以下じゃろもん、というあきらめもありましたが…

Bさん　昔に比ぶっと、仕事の内容も密度も濃ゆくなっとろが。賃金は上がらんでの。

Cさん　独占資本は甘くなかつばい。目ン玉んいろが変わらんなら、取れるもんも取れん。

三川坑外職場新聞〝はぐるま〟（四月十五日発行）の記事。

Dさん　何もせんチいうたっちゃ、俺げでん、賃上げにボーナスのときくらい、ストしても取らんならナ。係長や係員にしても、同じことがいわるるばい。

Eさん　社外工の俺どもは、あんたどんがかばって取ってくれんと、雀の涙のしこもなか。

Fさん　この前の〝はぐるま〟に、「人間には欲望のあるけん、金には限りがなか」、ていうた人があったが、実際に食われんけん要求しとっとじゃろが。霞食っちゃ生きられん。

Gさん　独占資本は甘くなかつばい。目ン玉んいろが変わらんなら、取れるもんも取れん。

×

三川坑外職場新聞〝はぐるま〟（四月十五日発行）の記事。

ゼニは欲しかくせにでれーッとしとって何の上がろかん。会社は、生かさず殺さずの政策ばん。

かわら版

利子が減り物価は値上がり

俺は音（ネ）をあげた。

――一炭鉱労働者

（彦一・作）